

MACF 礼拝説教要旨

2021年10月17日

ルカによる福音書 #09

「ヨハネの時代と彼の働き」

ルカによる福音書 3章

3:1 皇帝ティベリウスの治世の第十五年、ポンティオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデがガリラヤの領主、その兄弟フィリポがイトラヤとトラコン地方の領主、リサニアがアビレネの領主、

3:2 アンナスとカイアファとが大祭司であったとき、神の言葉が荒野でザカリアの子ヨハネに降った。

3:3 そこで、ヨハネはヨルダン川沿いの地方一帯に行き、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。

3:4 これは、預言者イザヤの書に書いてあるとおりである。「荒野で叫ぶ者の声がある。『主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。』」

3:5 谷はすべて埋められ、山と丘はみな低くされる。曲がった道はまっすぐに、でこぼこの道は平らになり、

3:6 人は皆、神の救いを仰ぎ見る。』」

3:7 そこでヨハネは、洗礼を授けてもらおうとして出て来た群衆に言った。「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。

3:8 悔い改めにふさわしい実を結べ。『我々の父はアブラハムだ』などという考えを起こすな。言うておくが、神はこんな石ころからでも、アブラハムの子たちを造り出すことができになる。

3:9 斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。」

3:10 そこで群衆は、「では、わたしたちはどうすればよいのですか」と尋ねた。

3:11 ヨハネは、「下着を二枚持っている者は、一枚も持たない者に分けてやれ。食べ物を持っている者も同じようにせよ」と答えた。

3:12 徴税人も洗礼を受けるために来て、「先生、わたしたちはどうすればよいのですか」と言った。

3:13 ヨハネは、「規定以上のものは取り立てるな」と言った。

3:14 兵士も、「このわたしたちはどうすればよいのですか」と尋ねた。ヨハネは、「だれからも金をゆすり取ったり、だまし取ったりするな。自分の給料で満足せよ」と言った。

3:15 民衆はメシアを待ち望んでいて、ヨハネについて、もしかしたら彼がメシアではないかと、皆心の中で考えていた。

+++++

1) 歴史的信憑性

3:1 皇帝ティベリウスの治世の第十五年、ポンティオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデがガリラヤの領主、その兄弟フィリポがイトラヤとトラコン地方の領主、リサニアがアビレネの領主、

3:2 アンナスとカイアファとが大祭司であったとき、神の言葉が荒野でザカリアの子ヨハネに降った。

この3章はクリスマスの物語から約30年経っています。また2章の終わりの12歳のイエス様の物語からは18年経過しています。

ここから福音書の本編が始まります。

つまり、救い主としてのイエス様の働きそのものがいよいよ始まろうとしているわけです。

これだけ具体的に政治家たちの名前や宗教指導者の名前が書かれているのは、イエス様についての出来事がいい加減な作り話ではなく、実際に起こったできことなのだとすることを明らかにするためです。

歴史資料を用いて、この時代を調べれば、これらの政治家の背景や事件、その時代の様子を知ることができます。

ポンティオ・ピラトとかヘロデとかアンナスとカイアファとかいう名前は、イエス様の十字架の出来事と関係して出てくる名前でもあります。

要するにこれから書かれようとしている出来事は歴史の中にしっかりと記憶されており、記録されている出来事だということです。

2) ヨハネという人物

3:2 アンナスとカイアファとが大祭司であったとき、神の言葉が荒野でザカリアの子ヨハネに降った。

3:3 そこで、ヨハネはヨルダン川沿いの地方一行って、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。

と書かれていますが、ヨハネが突然覚醒して何かを始めたのではなく「神の言葉が彼に降り」、彼はその言葉に押し出されて、活動を始めたのです。

つまり、福音の発案者、そして原動力となる動機付けを与えてくださるのは神ご自身だということです。

単なる人間の思い込みで神の福音を語ることも伝えることも難しいのです。

そもそも、神の福音の発案者は神様ご自身であり、その中身自体が「神様の心」なので、本当に神様によって整えられなければ「人の作った福音」ということになってしまいます。

*ヨハネは荒野で神の言葉を受け取った

普通、神の言葉が受け取られるべきところとして理解されているのは「神殿」でした。

人々は神殿に行き神を礼拝し、また「会堂」に行ってみ言葉を聞き、学び、受け取りました。ところがヨハネは「荒野でみ言葉を受け取った」というのです。

思うに、ひとりになっていなければわからない内容を含んだ神の言葉であったと思います。

一般的に知られているのとはちょっと違う、頭で理解すれば済むような内容とは違う

神の言葉です。

それは人を行動に駆り立てる強い方向性をもった「神の言葉」をヨハネは受け取りました。

*ヨハネの役割の中心は「救い主のために道を備えること」そして、その方法は「悔い改めのバプテスマ」

ヨハネはイザヤ書の言葉を引用して自分が主の道を整えるために来たものだとすることを主張します。

そして、そのメッセージは当然、そのあとに救い主がおいでになるということをお教えています。

引用箇所はイザヤ書 40 章です。これは有名なメサイアの冒頭のところで歌われる箇所でもあります。

40:1 慰めよ、わたしの民を慰めよとあなたたちの神は言われる。

40:2 エルサレムの心に語りかけ、彼女に呼びかけよ、苦役の時は今や満ち、彼女の咎は償われた、と。罪のすべてに倍する報いを主の御手から受けた、と。

40:3 呼びかける声がある。主のために、荒れ野に道を備え、わたしたちの神のために、荒れ地に広い道を通せ。

40:4 谷はすべて身を起こし、山と丘は身を低くせよ。

険しい道は平らに、狭い道は広い谷となれ。

．．．

40:11 主は羊飼いとて群れを養い、御腕をもって集め、小羊をふところに抱き、その母を導いて行かれる。

ヨハネは、彼自身の役目を「谷はすべて身を起こし、山と丘は身を低くせよ。険しい道は平らに、狭い道は広い谷となれ。」に基づいて、謙遜な、誠実な人がきちんと評価され高慢な人が裁かれ、身を低くされるような出来事がもたらされることと考え、それによって救い主を迎える準備ができるのだと考えています。そのために必要なのは「悔い改めにふさわしい洗礼」です。

これを彼はヨルダン川で行うわけですが、普通ユダヤ教における清めは神殿中心であり神殿で身を洗うことでもありました。。

しかし、ヨハネはヨルダン川でそれを実行しました。

神殿には既にある種の偽善がまかり通り、本来的な悔い改めや礼拝の心が歪められてしまっていたのかもしれない。

3) ヨハネによる「洗礼と悔い改め」

「主のために、道を備える」という具体的な内容は悔い改め・救い主を迎えるための悔い改めを意味しています。

ヨハネが勧める「洗礼」は、神の喜ぶ生き方にならって生きるということに同意したという意味での出来事としてヨハネは理解しています。

念の為、イエス様の御名による洗礼は少し内容が違います。

「私はイエス様と一緒に死に、イエス様と一緒に甦りました。私のいのちはキリストによって神の中に包まれ、隠されています」ということの表明、イエス様との一体化の表明だからです。

ヨハネは、具体的な生活様式を変えて神の道に倣って生きるように強く勧めます。それができなければ、それをしなければ神からの怒りが降ると教えたのです。

**

3:7 そこでヨハネは、洗礼を授けてもらおうとして出て来た群衆に言った。「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。

3:8 悔い改めにふさわしい実を結べ。『我々の父はアブラハムだ』などという考えを起こすな。言うておくが、神はこんな石ころからでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。

3:9 斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。」

3:10 そこで群衆は、「では、わたしたちはどうすればよいのですか」と尋ねた。

3:11 ヨハネは、「下着を二枚持っている者は、一枚も持たない者に分けてやれ。食べ物を持っている者も同じようにせよ」と答えた。

3:12 徴税人も洗礼を受けるために来て、「先生、わたしたちはどうすればよいのですか」と言った。

3:13 ヨハネは、「規定以上のものは取り立てるな」と言った。

3:14 兵士も、「このわたしたちはどうすればよいのですか」と尋ねた。ヨハネは、「だれからも金をゆすり取ったり、だまし取ったりするな。自分の給料で満足せよ」と言った。

これを守ることで救われるわけではありません。

こういう生き方をしていきますという意識で洗礼を受けることで「救い主と出会える心を持てる」というのです。この洗礼とその生き方によって、救い主との関係を直接的に体験できるようになるのだと彼は語っているのです。とにかく「神様の願っている心を実行しながら生きていきます。」という表明がヨハネによる洗礼の特徴です。

条件は「悔い改め」。

自分の心の山を低くすること。自分の谷を埋めて高く平地にすること。

「自分の中の不足」「自分の中の荒れた心」「自分の中の不完全さ」を自覚することです。それを洗礼という形で自覚することで救い主を歓迎できるのだということです。

高慢、卑屈、絶望の心を自覚しているなら、そこからの助けを求めて救い主のもとに向かう姿勢をもつことです。

それが出発点だということです。

ヨハネはそういう心で救い主を待つことの大切さを教えています。

それがないと、救い主の必要性も、その意味もわからないままになってしまうからです。

自分の心に山や谷や荒れた道路があることを自覚できると、そのままではいけないことに気づけます。

それが救い主を待つ心につながるのです。

それはまさに、旧約聖書のメインテーマでもありました。ヨハネは旧約聖書の教えの最終ランナーでもありました。そこから救い主にバトンを渡したからです。

礼拝映像はこちらです。

<https://youtu.be/i7FpghZhS-k>